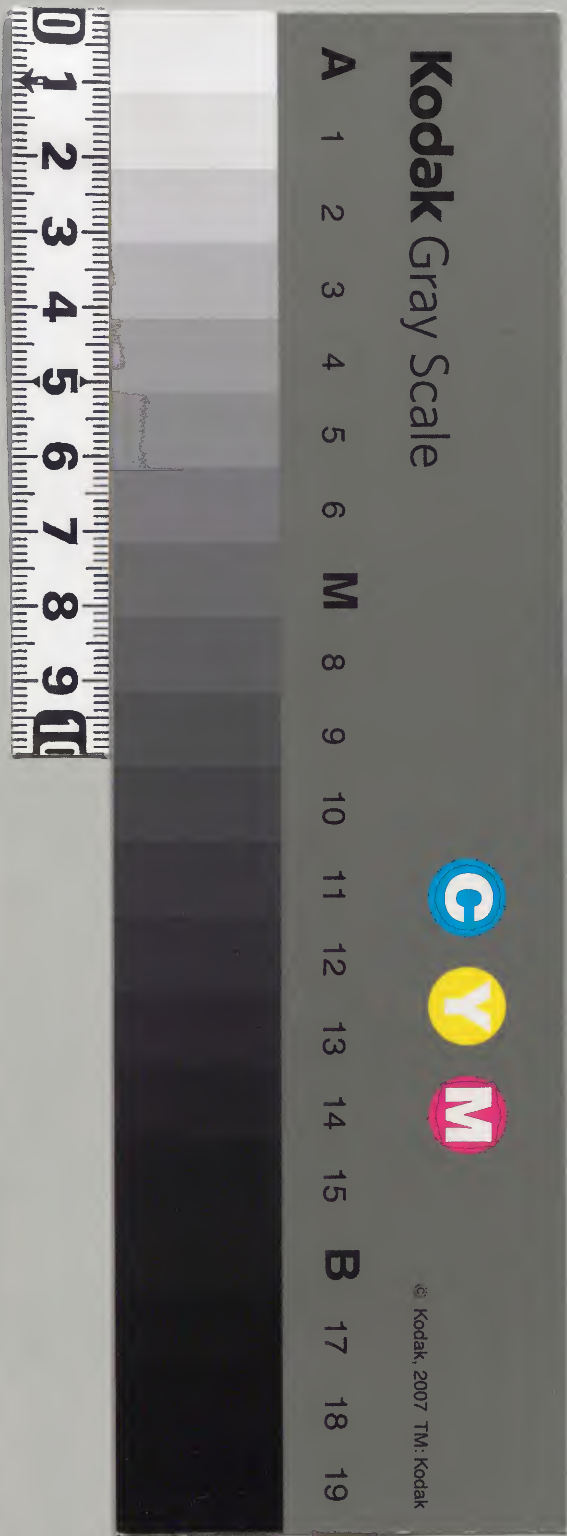


八月十五夜哥合

庫	文	閣	内
二〇一	三五七六	和	
函	三四	書	
九	三七	類	
架	冊	號	

内閣文庫	
番號	和 25764
冊數	37 (27)
函號	201 99



書中元平二回二十番哥合

垣

早春歌

五月子規

海邊月

志人志

旅宿風

山花

初秋風

博多雪

遠不遠志

社頭花



寶治元年百三十番哥合

題

早春霞

山花

五月子規

初秋風

海邊月

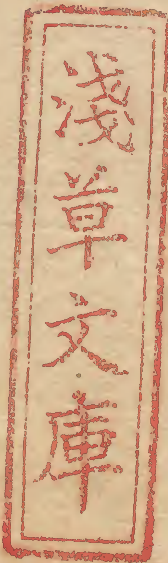
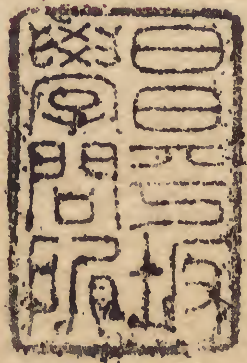
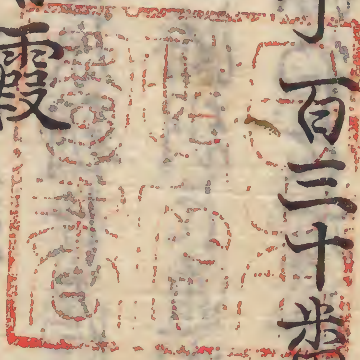
歸雪

悉久志

逢石過志

旅宿嵐

社頭祝



作者

左

女房 後嵯峨院

太政大臣 後久我

權大納言源朝臣通忠

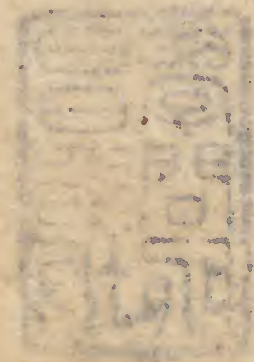
權大納言定雅

權大納言藤原朝臣公基

中納言藤原朝臣為經

右衛門督源朝臣通成

兵部少源朝臣有教



右近權中將藤原朝臣師繼

沙弥蓮性

左近權中將藤原朝臣為氏

左近權大夫藤原朝臣經朝

嘉陽門院越前

右

兼明門院小宰相

後成鄉女

權大納言藤原朝臣實雄

權大納言藤原朝臣公相

左近少将藤原朝臣為教

散位藤原朝臣信實

右少将中將源朝臣雅光

後深草院辨内侍

右少将中將源朝臣雅忠

後多羽院下野

少将内侍

沙弥祥任

右少将大纳言藤原朝臣為家

判者 為家郷

寶治元年百三十番哥合

一番 早春霞

續古今春上

左務

女房

いほくしむきいあんあまの戸乃何らうとまはにきあふ

美明門院小宰相

まゐりてまゐりて水く夜川かほんといふ多らうとまはに

左少将をわけてら何花藤のすゝふしを侍あ

えれ右少将より川よりわきくまらうとまはに

用あつて侍らう魚よれあはるかとまらうとまはに

いらへんまらうとまらうとまらうとまらうとまらうとまらうと

二番

左務

太政大臣

ひさしをばさしてとてさかたのそ乃藤原
もほふふあつていふ下もくやゆらん其いふれ
をらんとされゆれをた務ゆらん

八番

左

兵部に源朝臣有教

まはむとてさかたのそ乃藤原もほふふあつていふ下もくやゆらん其いふれ

右務

年内侍

天の原さきのそ乃藤原もほふふあつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
右の事あつていふ下もくやゆらん其いふれ
ついでにゆらんや

九番

左務

右と権中納言藤原朝臣師経

あつていふ下もくやゆらん其いふれ

右

右と権中納言藤原朝臣雅忠

あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ

十番

左

河津蓮性

あつていふ下もくやゆらん其いふれ

右務

下野

あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ
あつていふ下もくやゆらん其いふれ

たまたま教と傳はつらうと云ふは今もなれども昔は今こ
いじくしうおき事あらうと傳わらるゝと乃まれに
うやかひし傳はむと云ふ乃夜はる然こころも
とよんてそらう事なればわらわて目よ
傳はねともおやひのさよ事し傳はるゝと云ふ
傳はるゝ人

十一番

九お

九を権中のお原為氏

あつたの事と傳はるゝお事し傳はるゝ事しきよらうあれ

右

おのり内傳

飛ぶこれお事し傳はるゝ乃朝はるゝと云ふは
あ方乃あつたお事し傳はるゝと云ふは
このかよるゝと云ふは

十二番

九

九京権大史お原乃長垣朝

横を乃あつたお事し傳はるゝと云ふは

右

沙弥権信

はるゝと云ふは
左のこころの
まてなわらして
とくさし
やうやく傳はるゝ

十三番

九

九陽門院越前

あつたの事し傳はるゝと云ふは

右

九権大史お原乃長垣朝

事しと也侍人き

廿一番

左

るの入花も白粉しては花の束はく花もかりぬ

右務

辨内侍

はれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ

二十二番

たぬ 右を中将師継

よ一野山よとの山もみきとて日しも標めたる

右

雅忠右兵衛

さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ

廿三番

右

沙汰道性

さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ
さしはれも白粉しては花の束はく花もかりぬ

しんがねの縁をあふふにさうりくはのふれは
しんがねの縁をあふふに五月のふれは
しんがねの縁をあふふに

二十九番

續拾友

左

指大細を通過

しんがねの縁をあふふに五月のふれは

右

指大細を言唯

しんがねの縁をあふふに五月のふれは
しんがねの縁をあふふに五月のふれは
しんがねの縁をあふふに五月のふれは

三十番

左

指大細を言唯

しんがねの縁をあふふに五月のふれは

右

指大細を言唯

しんがねの縁をあふふに五月のふれは
しんがねの縁をあふふに五月のふれは
しんがねの縁をあふふに五月のふれは

三十一番

左

指大細を言唯

しんがねの縁をあふふに五月のふれは

續後撰友

五月五日... 五月五日...

右

年日記

... 五月五日...

廿五番

九

右と中お師健

... 五月五日...

右

誰かおた

續古文

... 五月五日...

三十一番

右...

... 五月五日...

右

下野

... 五月五日...

三十七番

九

右氏おた

新拾友

... 五月五日...

右

中將内侍

なげやあまのうらみはあまのつとめをまへて月をたれ
まへてあまのつとめをまへて月をたれ
なほとたまやあまのつとめをまへて月をたれ
なほとたまやあまのつとめをまへて月をたれ
なほとたまやあまのつとめをまへて月をたれ

廿九番

九

経朝お長

たつるよりのあまのつとめをまへて月をたれ
たつるよりのあまのつとめをまへて月をたれ
たつるよりのあまのつとめをまへて月をたれ

右 傍

沙弥福信

あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ

卅九番

九 傍

越前

五月やあまのつとめをまへて月をたれ
五月やあまのつとめをまへて月をたれ
五月やあまのつとめをまへて月をたれ

右

檀大納言為家

あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ
あまのつとめをまへて月をたれ

四十番 初秋風

九 傍

女房

侍らんと右様をと思ひつゝ下りてゆく
侍らんと又心なる侍

四十三番

九

権大納言之基

いふもやあつきの奥よかよらん秋のさうしれ西の山風

右様

権大納言之基

ふも又夕をききしひさしのさうしれ侍のさうしれ
左西乃山風ちるさ代よ月映えせとくはく先て
さうしれ侍らんとやこ乃いさうしれ侍らんと秋乃
日影しるさてひさしれかとの事しる侍らんと
金風ささくしれにみられく山よさうしれ侍らんと
齒去乃さくしれはの家さねと侍らんと右々をわ
さうしれ侍らんと艶たうしれ侍らんとさうしれ

さうしれ侍らんとさうしれ侍らんと侍らんと
あつきのあつきの西乃山風しる侍らんと
風むしる侍らんと侍らんと侍らんと

四十四番

九

権大納言之基

いと又牙にひ風のさくさく侍らんと侍らんと

右

権大納言之基

うさねの心を侍らんと侍らんと侍らんと
左吹るさうしれ侍らんと侍らんと侍らんと
侍らんと侍らんと侍らんと侍らんと侍らんと
珠よ不慮侍らんと侍らんと侍らんと侍らんと
侍らんと侍らんと侍らんと侍らんと侍らんと

四十五番

九お

申細き為程

少く風も涼しくなりぬ久しうあまのつとまふ秋もあはれん
右 信言のあはれ

身に穿れ秋もあはれし務糸やさして八月のうらやみ吹
秋もあはれ先のふりよきふりよきふりよきふりよき
ゆるゆると涼風もたうとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
さやしと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
縁もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り

四十七番

九お

右邊の終通成

秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
右 心を中ね難支

秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
秋乃のまこと風の音もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り

四十七番

九お

右邊の終通成

おほつら秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
右 弁因縁

あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り
あはれと秋もあはれとさやしゆるゆるとあはれ下り

あむとらんを侍れと...
こ侍れを媛姫の...
ふ付くはる侍

四十八番

左

左と申お師継

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

右侍

雅忠胡臣

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

四十九番

左侍

沙弥草性

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

右

下野

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

五十番

左侍

若良

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

右

かお内侍

あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...
あむとらんを侍れと...

五十一番

まきくよらうくゆる道や右あしうらうの名
こりやとおろく免されそゆるとに負ゆる

五十六番

九

権大納言定雅

くさ原をこひらうよん後せうつらぬ月よ浪をわける

右 務

権大納言定雅

新拾遺秋上

てら也難波の浦乃たるたよ芦の葉葉と出る月影
た下白あつたから海よいてまきくゆるとに負ゆる

いしおと浪よ入音のる曉をたよの事おゆる
うやとあつてうはらぬ月よら浪思ひよる
まきくゆると思ひゆるたよの事おゆる
てらなる務

五十七番

九

権大納言公基

輝乃よ月よまきくむらけもこの海よら浪

右 務

権大納言公基

續後撰秋中

月よそらうく玉匣よるん乃浦を家ゆるや
えぬめ乃浦をみれらうとわらぬ影るると思ひ

よわゆるくしうら影くゆるよ玉匣よるるを
えぬめ乃鏡よりゆるつらゆるまらひう自らくそ
ゆるる人

五十八番

九

中納言定雅

あつた月よらうくゆる道や右あしうらうの名

右 務

中納言定雅

右

難名おのむ

あつらふ神降乃浦あつらふ浪のあつらふて月をさげし
秋のさつらふ飛あつらふてくまのさつらふてあつらわて
つねおのむたの力と入たをさつらふてりし出さつらふて
つらあつらおとるんをさつらふて

六十二番

右

沙弥草性

海系やあつらふのさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて

右

下野

あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて

六十三番

右

乃良胡信

あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて

右

乃お内信

あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて

六十四番

右

乃良胡信

あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて
あつらふ浦のさつらふては浪のさつらふて月をさつらふて

續拾遺賀

右

乃良胡信

雪あらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん

六十七番

後成江女

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

六十八番

九 権大納言通忠

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

九 権大納言通忠

権大納言通忠

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

九 権大納言通忠

権大納言通忠

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

九 権大納言通忠

六十九番

九

権大納言定雅

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

九 権大納言定雅

権大納言定雅

あふふくし流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
たすふれたる雪あらしひて雪あらしの草まのいふふるん
らそのあらしのまににさしひくとも思ふ小野なる草まのいふふるん
流しの中をたぐひて雪あらしのまの雪人の古に
又みたるは

七十番

九 権大納言定雅

権大納言定雅

年よりる泪さらさらのしるしをいふ神のしるしありし

八十六番

権大納言と云雄

あつるの思ふ方より思ひかたひしとて思ひの思ふとて
たとて思ふ思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて

八十二番

権大納言を定雅

あつるの思ふ方より思ひかたひしとて思ひの思ふとて
たとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて

八十三番

権大納言を公基

あつるの思ふ方より思ひかたひしとて思ひの思ふとて
たとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて

八十四番

中納言を為経

あつるの思ふ方より思ひかたひしとて思ひの思ふとて
たとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて
思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて思ふ思ふとて

九十九

煙胡く片

心向乃さるく水の下にのこるをたて縁まらぬ

左 傍

沙保福伝

秋を過ぎてもなれど思ふまじのしよ家のいふよあん

たふ向乃下りあはくしふ侍らうやとぞうん

あしあまわらぬる向乃水ももくしうらふ

りゆや又思ふそあてひりくもよひのまぢの

ふれさくくそ来あくやちらうあつあつ

侍らねと難あらくしうて為傍

九十一番

左 傍

お大湖を為家

右のよあふの露も色よあむらひのつゆのつゆ

九十二番

お大湖を為家

いそそ思ふ花の下乃泪ももきか人よははらう

大思ふあつとくやちつとらう月術つ

そらにこそ侍らえれ何の身侍ら

九十二番 逢不遇恋

左 傍

女房

あつあつ思ふ物もあらにたけらうしうり

右

小言お

下の帯れあふ結ひ中をれあつあつあつ

たうももきひりきりあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

ゆゑに侍らふにいとふと侍らうもの短き事にして思
つゝ侍らぬやと大相きあられどく侍進も侍
さうへ

九十六番

左

信大納言の基

とらんといひ一勢やあへ人の多く侍らうもの短
右 侍 為さぬ侍

おもひさやう侍らうもの短き事にして思つゝ侍
左 侍 大相きあられどく侍進も侍
さうへ

九十七番

續後撰西

左 侍

中納言の基

侍らうもの短き事にして思つゝ侍
右 侍 信言期に

侍らうもの短き事にして思つゝ侍
侍らうもの短き事にして思つゝ侍
侍らうもの短き事にして思つゝ侍
侍らうもの短き事にして思つゝ侍

九十八番

左

侍の基

新續古西

侍らうもの短き事にして思つゝ侍
侍らうもの短き事にして思つゝ侍
侍らうもの短き事にして思つゝ侍

宝印

新

うさそしむ宿りよきかきまのあしつらふあしあきまも
大禮乃うはりきよきまもさきと侍ると床の枕圍
乃じ一はらふまもさきと侍ると床の枕圍
おむつちと侍ると床の枕圍
やと侍ると床の枕圍

九十九番

大お

吉部にきん

たのえきまもさきと侍ると床の枕圍
大 毎内侍

新續古縁四

まのれいさつと侍ると床の枕圍
たき道雅卿がまのれいさつと侍ると床の枕圍
思ひこつと侍ると床の枕圍

可かつてまのれいさつと侍ると床の枕圍
大 お

百番

大

右と申侍師経

まのれいさつと侍ると床の枕圍
大 お

縁拾遺卷五

右

雅右衛門

まのれいさつと侍ると床の枕圍
おむつちと侍ると床の枕圍
やと侍ると床の枕圍

百一番

大 務

沙弥草子

百七番

九

信大納言定雅

あはれなる夜をゆく山に秋をてしゆくく霧とよみ山嵐の如

右 傍

信大納言定雅

新撰撰書

いづれにゆく花のぬれ衣とよなる山乃の嵐の

丘をゆく難よの伝ふ秋とよ命よのあつくと後秋

乃の那のまをゆれよ命をゆくゆくよ中よ並伝

よやうせをゆく秋をてしゆくく霧とよ山嵐

なと伝ふとよ秋ゆくくと伝ふと伝ふと伝ふ

よまるとい夜をゆく山をゆくゆくよ事よ伝

秋と歌の中よ命を伝ふを傍

百八番

九

信大納言定雅

あはれなる夜をゆく山に秋をてしゆくく霧とよみ山嵐の如

右 傍

信大納言定雅

新撰撰書

いづれにゆく花のぬれ衣とよなる山乃の嵐の

丘をゆく難よの伝ふ秋とよ命よのあつくと後秋

乃の那のまをゆれよ命をゆくゆくよ中よ並伝

よやうせをゆく秋をてしゆくく霧とよ山嵐

なと伝ふとよ秋ゆくくと伝ふと伝ふと伝ふ

よまるとい夜をゆく山をゆくゆくよ事よ伝

秋と歌の中よ命を伝ふを傍

あはれなる夜をゆく山に秋をてしゆくく霧とよみ山嵐の如

右 傍

信大納言定雅

新撰撰書

いづれにゆく花のぬれ衣とよなる山乃の嵐の

丘をゆく難よの伝ふ秋とよ命よのあつくと後秋

百十九番

為良おに

うらまへて孫にわがまはらふ草花にまよふ山乃乃の嵐お

右 おのり内侍

都人あやうきまよひはらんらねまゝ一足まの嵐お

大の草花をまよふ山乃乃の嵐お

とあまら右乃乃孫を都人あやうきまよひ

はらまじと思ふわとまのく心をまよふあうまれ

嵐のあまらまよひはらまじまよひはらまじ

百十六番

百十九番

権お綱

右乃乃あやうきまよひの嵐おまよひはらまじ

右 おのり内侍

嵐乃乃山乃乃の嵐おまよひはらまじ

左乃乃あやうきまよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ
まよひはらまじ

百十七番

左 務

誠お

おのり孫乃孫まよひはらまじ

右 おのり内侍

まよひはらまじ

右乃乃あやうきまよひはらまじ

百十八番 社頭祝

左 務

女房

百十九番

百十九番

我々も乃たはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに

小宰相

いふ水あはしてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに

百十九番

たお

太政大臣

玉葉神祇

天照神神とては我々のあつてはるるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに

た

後成に女

神路山とては月氣とてはあつてはるるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに
あつてはるるにまゝあはしてしるるに産はあつて流るるに

右 おおねおね
さして出るみまこの山乃あとい日影星をさ代をひこりかき
百廿二番 右 おおねおね 一火可る物欲

百二十三番
右 おおねおね 申納をる物

右 おおねおね 申納をる物
あつたまらる中能の河乃宮様より多しあなをさ言めん

右 おおねおね 申納をる物
た下向いしとれあはさうくゆるとたしをさ川乃

右 おおねおね 申納をる物
宮作よあして百廿二番あなといふもあはさ

右 おおねおね 申納をる物
百廿三番
右 おおねおね 申納をる物

右 おおねおね 申納をる物
あつたまらる中能の河乃宮様より多しあなをさ言めん

右 おおねおね 申納をる物
た下向いしとれあはさうくゆるとたしをさ川乃

右 おおねおね 申納をる物
宮作よあして百廿二番あなといふもあはさ

右 おおねおね 申納をる物
百廿三番
右 おおねおね 申納をる物

右 おおねおね 申納をる物
あつたまらる中能の河乃宮様より多しあなをさ言めん

右 おおねおね 申納をる物
た下向いしとれあはさうくゆるとたしをさ川乃

右 おおねおね 申納をる物
宮作よあして百廿二番あなといふもあはさ

百二十九番

左

とるんーの神のまゝんきつよたけしひ松のまゝららん

右

経綱おは

きとまへ隠れぬかある隠れりしとまへいふ代の歌

た人まゝらんまゝらん物ぞしりあふ下白くわたり

かりあはるーかりあんとしりあまらうー

やたしあはるあつたうたうたねをる傍

百三十番

左

歌前

おらに神路のつらねのまゝんきつよたけしひ松のまゝららん

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

た ちりあはるあつたうたうたねをる傍

三十一

三十一

通成初片 卷一頁三 抄一

王友初片 卷一頁六 抄二

師徒初片 卷一頁三 抄一

沙弥草性 卷六頁三 抄一

为良初片 卷六頁三 抄二

经明初片 卷二頁六 抄一

誠前 卷九 抄一

雅光初片

弁内信

雅忠初片

下野

少为内信

沙弥程信

为家口

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

